

イコム大会報告書

(第17回ノルウェー スタバンガー大会)

平成8年3月

財団法人 日本博物館協会

はじめに

1995年7月、第17回イコム大会がノルウェーのスタバンガー市において8日間に亘り開催された。日本国内委員会では、東京国立博物館館長佐野文一郎委員長の代理としての植木東京国立近代美術館館長、毛利日本博物館協会専務理事、国立科学博物館小山植物研究部長等が参加し、多くの会議に出席した。

また、日本国内委員会からの参加者は16名、大会の参加者は111ヶ国から1,500名であった。

大会開会式ではノルウェーのソンジャ女王、文化大臣、ユネスコ事務総長等が出席され、民族音楽の披露等を交え、華やかで盛大な式典が行われた。全体に地域の特殊性が発揮された大会であった。

平成8年3月

目 次

はじめに

1. 大会日程	1
2. 諮問委員会報告	2
3. 基調講演	3
4. 総会報告	8
5. イコム10カ年計画	10
6. 総会決議	13
7. イコム アジアパシフィック機構会議報告	15
8. 第17回イコム大会に参加して	16
9. イコム規約	38
10. イコム日本委員会規程	63
11. イコム アジアパシフィック機構規程	69



1. 大会日程

日 時	内 容
7月1日(土)	
08:00～24:00	受付
09:00～12:00	諮問委員会
14:00～17:00	諮問委員会 (国内委員会・国際委員会)
17:30～19:00	初めての参加者のためのオリエンテーション
19:30	非公式パーティ
7月2日(日)	
07:00～17:00	受付
09:00～12:00	開会式 基調講演
12:00～14:00	見本市 (Trade Fair) 開会 昼食
14:00～17:00	国際委員会会議
17:30～19:30	地域機構・ヨーロッパグループ会議
20:00	コンサートとレセプション
7月3日(月)	
09:00～12:00	諮問委員会
14:00～17:00	執行委員会 国際委員会会議
17:00～19:30	地域機構・ヨーロッパグループ合同代表者会議
7月4日(火)	
09:00～17:00	国際委員会会議
12:00～14:00	決議委員会・プログラム委員会・倫理委員会
17:30～19:30	地域機構・ヨーロッパグループ会議
7月5日(水)	
09:00～12:00	執行委員会
09:00～17:00	国際委員会会議
12:00	決議委員会・プログラム委員会・倫理委員会
一日中	編集委員会
7月6日(木)	
一日中	Excursion
7月7日(金)	
09:00～12:00	総会
12:00～14:00	諮問委員会
14:00～16:30	最終セッション (総会報告とテーマ討論)
16:30～18:00	執行委員会
20:00	フェアウエルパーティ

2. 諮問委員会報告

■ 7月1日 9:00~12:00 セッション1

事務局長より次の活動報告があった。

- 1992~95年の間に会員が25%増加
- 文化財の不法取引について、地域別（アフリカ、アンコール）に、盗難資料のリストを作成し、イコムニュースに掲載
- ユネスコイコム情報センターの改革（資料と人数）
- インターネットへの参加
- イコム財政の改善、人事の改善
- 文化財の不法取引防止のための諸活動（ユネスコと協力）

■ 7月1日 13:00~17:00 セッション2

- 1998年大会はオーストラリアで行うことに決定
(期間1998年10月1日~8日の予定)
- オランダ文化大臣よりオランダの博物館事情について報告（オランダ政府によるデルタ計画（文化財保護）の促進）
- 諮問委員会 委員長に Jacques Perot 氏バリー軍事博物館館長を選出
- イコム規約の修正
- 3ヵ年計画（1996~1998）
主なテーマ 不法取引対策の促進

■ 7月3日 9:00~12:00

- 国際委員会におけるワーキンググループの報告
- 地方委員会及び関連組織の設立
- その他

日本の植木浩副委員長は阪神・淡路大震災に際し ICOM 事務局特に国際保存委員会の支援と援助に対し感謝した。

3. 基調講演

「博物館とコミュニティ」のテーマのもとに行われた大会の
基調講演の中から、いくつかを抜粋し、要旨を掲載する。

基調講演要旨 1

「国家的統一の創出—博物館の役割」

Soroi Murepo Eoe

バプアニューギニア国立博物館
(ポートモレスビー)

世界中で博物館はいつの時も遺物の保護者であったし、その国の誇りと国民的自覚の源泉であり続けた。今日博物館は、特に国家的、部族的衝突のみならずその国及び部族の存続の問題に立ち向っている発展途上国に於て、如何なる役割を演ずることができるか。今日博物館は、現在の知的、教育的問題だけでなく社会経済的及び政治的問題にも係わっている。博物館がただ資料を収集していればよい時代は過去の事である。今日我々はこれらのコレクションが過去や現在を語り、将来に光を投じることを期待している。

発展途上国における多くの人々は博物館の基本的使命を理解しているが、無知から、或いは自分達が生きるのに非常に困難なため、博物館がその人々に如何に役立ち、なぜ存在するのかに気づいていない人達がいる。その他の国々の中には、今なお武力紛争の中にあり、非常に重要な文化資料や遺跡が破壊されたり略奪されたりしている所もある。更に、特に太平洋地域の発展途上国における教育あるエリートの中には、博物館のコレクションは既に忘れられてしまっている文化の重要でない遺物、遺跡であり、博物館はただ地域文化を部分的に展示すればよく、人々の実際の役にはたらず、それらに資金を投資するより他に使用した方がはるかに良いと信じている人々がいる。

1980年代後半以来、文化センターとしての博物館を定義し直し、現代アートとパフォーマンスアートを統合し、文化的独自性を保ち維持しているローカルの活動に近づけようとする新しい概念が出現している。然し研究、収集、教育機能等、博物館が今迄行ってきた活動は、現実合わないものとして考えることもできるだろう。それでもなお、これらの現存の機能は必ずしも新しい概念と矛盾しない。

バプアニューギニア国立博物館は文化的アイデンティティに貢献することによって、上記の事柄が正しいことを立証している。西太平洋にあるバプアニューギニア

は800の異なる言語と250以上の文化グループを抱えている。そのモットーは“多様性における統一”である。博物館に於ては、この統一は資料の収集のみに基づくのではなく、パフォーマンスアート、オーラルヒストリー、言葉等のような他文化を構成している要素をリンクさせることを基礎にしている。若し国民的統一が妥協の上に立つ脆い物であるなら、その時博物館はそのバランスを保つのに更に重要な役割を演ずる。博物館は文化的独自性を維持し、国民的統一を保証するために、それぞれの国民の遺産の保護の継続と促進に努力すべきである。

基調講演要旨 2

「博物館と文化の多様性—土着文化と支配文化」

Ole Henrik Magga

サミ管理委員会委員長
(ノルウェイ)

本報告は、文化遺産に関するサミの状況について特に博物館に展示されている方法について述べたものである。サミの工芸品を集中的に取り扱っている博物館は、原始社会と発達した社会とを対比させ、これは他の国でも同じであるが、植民地社会を支持する階級制度を正当化している。1850年にノルウェーが新しい国家アイデンティティの起源を作ろうとした時、サミ文化は見過された。博物館では、サミ文化財は民俗資料として処理された。その過去は皆同じで、静止しており、死んだ文化であると見られ、そしてその歴史は植民地支配を正当化する定型を否認した。

多くのスカンジナビアの科学者達はこの定理に盲従しているけれども、スカンジナビアの科学研究はヨーロッパの科学的伝統が持つ最良な方法により行なわれ、言語、人類学、社会学、歴史、宗教、法律等を含むサミ文化の多くの面に光を当て解明に努力している。この研究はサミ文化の民族的独自性の基礎の解明を行っている。これなくしては学校におけるサミ言語、サミ文化の紹介、及び博物館を含むサミに関する施設の建設は不可能である。

第二次大戦後、特に1970年代以来、多くの土着民族から彼等独自の遺跡の管理の要求が出ている。サミ民族にとってこれらの土地は言語と習慣と共に根本的に重要であり、それらがその民族の特殊性に不可欠な重要な部分である。

今日サミ管理委員会の主な目標は、ノルウェー社会内の少数民族として認められているサミ部族の文化を継承することである。サミ部族の生活、地名、部族的伝統、及びサミ文化の風景にとって重要と考えられる自然、あらゆる事物を含むサミ遺跡を保護することが、上記の文化的継続性の保存である。

土地を管理する権利は過去への権利と緊密につながっている。このことは博物館

が多数の工芸品、特にサミ部族が彼等独自のものと思っている先史的な遺物を集める時、しばしば論議となる。

そのような資料が“典型的なサミ資料”であるということを、彼ら自身の言葉の定義によってではなく、ノルウェー語によって証明することが要求される。そこで彼ら自身の過去のために闘うべき状況が生じる。過去に対する権利は現在そして未来への権利である。文化的遺産を保護し管理するサミの人々の仕事は、世界中の少数民族のモデルとして役立つであろう。

基調講演要旨 3

「博物館と文化の多様性—新たな挑戦」

Amina Dickerson

シカゴ歴史協会、教育公衆計画副会長
(アメリカ)

アメリカにおける大きな地方歴史博物館の一つであるとされているシカゴ歴史協会の過去及び現在の経験を、新しい世紀に向けて努力し、高い学問的水準と学芸の実践を支えその地域社会の生活に不可欠で重要な役割を果たしている施設の一例として示したい。多くのアメリカの市における最近の市民権運動等から人口比率の激変まで、複雑にからみ合った状況によってかき立てられ、社会施設の役割を再定義しようとするフィロソフィーやアプローチにおける変化が生じている。然し博物館の施設使命にもう一度焦点をあてることが恐らく最も重要であろう。それは、入館者が不明確が増大する将来に立ち向かう方法を過去より学ぶようにさせる、即ち広い意味での教育を公衆的サービスの役割を持つ施設で行うことである。

博物館の挑戦は多様な市民の歴史を総合し、異なる地域社会の多岐にわたる声、価値、背景の間における共通の場を発見することである。過去7年に亘って博物館は変化してきている。先づ収集するために収集するということをやめ、その収集品を利用し、市の公共的グループに展示したり、貸出すことに力を入れることに変ってきている。この方法は特に展示を進展させるためのチームワーク、最も新しい学問的研究の結合、テーマや内容の決定等への市民参加によって展開されている。

博物館の目的の一つであり、多分最も地域社会に貢献することの一つは、市民がその資料や記念物を見ることにより、自分の国の歴史及び文化を越えた大きなつながりの価値を知ることである。この新しい挑戦をすることにより、博物館は地域社会に近づき、広い協力を得ることができる。

施設によって達成された成果はあるにしても、増大する困窮者とホームレスを相手に、この時代に生じた社会問題に取り組むのに制限があるということに気づくべ

き重大な問題が依然として残っている。公衆に直接対処する時は学問的、学芸的責務を犠牲にしないで、もっと積極的な役割を果たすことができるであろうか。これまで支援し促進してきたコミュニティ内の対話を一層進めるべきであろうか。博物館とその地域の多様な住民との間のコミュニケーションギャップを一步一步埋めようとする時、博物館は今までの歴史、又博物館界でかつて経験したことのない大きな挑戦をしているといえる。

基調講演要旨 4

「博物館と地域社会— Fresnes のエコミュージアムの挑戦」

Françoise Wasserman

エコミュージアム キュレーター
(フランス)

今日、博物館はその新しい目標に気づき出している。即ち博物館はすべての住民や地域社会の発展、つまり文化を継続する生活のすべての結集である。研究対象となる母集団や利用者層、コレクションについて、今ではその区域やコミュニティーや環境等による考慮が加えられている。

この“コミュニティーミュージアム”の概念は文化的、地方的、国民的、人種的アイデンティティの問題と複雑に結びついている。実際、アイデンティティはしばしばコミュニティーミュージアムの考えを引き出すものとなっている。しかしながら例えば、ある地域社会が博物館をその概念を正当化するものとして利用したり、博物館や文化的資料がアイデンティティの考証にでなく口実に使われる時、時には誤りが生ずる。しかし、コミュニティーは制限を意味しないし、アイデンティティの探究は自動的にその他のものを否定するものではない。そこで、博物館のコンセプトは博物館学や市民権の名における容認できる制限はあっても、人権に根ざしたアプローチに基づくべきである。

この基本的構成ができたところで、フランスの都市のエコミュージアムの一例とその働き、目標を述べたいと思う。これはフランスエコミュージアムと称されパリ郊外南部の中心部にあり、他の異民族グループと交渉したり争ったりして、移住したり交換した地域にある。過去20年以上の調査にもかかわらず“郊外”という観念は依然としてばく然としている。“郊外”はただ集団を作っている様に思われる“都市の集合体”と比較される。今日博物館は、郊外の真の姿を示し、そこに住む人々を引きつけるべきである。

このエコミュージアムはその地方の文化財、その地方の資料や景観等に光を当て

るだけでなく、そこに集積された記念物を評価することも目指している。これは多面的であると同時に多文化的である。これはフランスの地方の多様性によるものであり、パリ地方の特徴を示している。そして、又多様なヨーロッパ人と非ヨーロッパ人の国であることに由来する。この博物館は、博物館の中で意見を発表することが歴史的にできなかった社会的、人種的、性的な少数者に、今それができるチャンスを与えることにした。このことは博物館が力を入れている展示テーマによってここ数年間行われている。例えば婦人と仕事、フランスで一番大きい Fresnes 刑務所の収容者と看守、伝統的な文化圏以外の郊外の青年の創意、移住者のコミュニティというテーマである。

このフランスのエコミュージアム及び他の同種博物館は、一般的に認められるアイデアを掘り起こし、従来への変化に刺戟を与えることを試みることができる。そして又すべての人種的偏見、差別に対する戦いをする媒介者として、又最も厳格な意味での政治的挑戦と言うことも出来る。

4. 総 会 報 告

■ 7月7日 9:00～12:00

- 1995年～1998年 執行委員の選出

[イコム執行委員会]

会 長 Saroj Ghose 博士 (インド)
副 会 長 Manyando Mukeia (ザンビア)
 〃 Patrik J. Boylan (イギリス)
収 入 役 Piet Pouw (オランダ)
委 員 Bernice Murphy (オーストラリア)
 〃 Yani Herreman (メキシコ)
 〃 Sid Ahmed Baghli (アルジェリア)
 〃 Robert Hoffmann (アメリカ)
 〃 Nancy Hushion (カナダ)

- 事務局より1992年～1995年の経緯説明
 - ・ヨルダンのアンマンで会議を開催。
 - ・イコムニュースは年4回の発行で内容と形式の充実をはかっている。
 - ・ユネスコ・イコム博物館情報センターにあるイコム関係以外の資料は、1995・年末までフランスの博物館に移動する。
 - ・イコムの財政状況は大幅に改善され欠損は解消した。
 - ・AFRICOM 計画について
 - ・文化財の不法取引についてユネスコ及び国際警察機構と協力し、成果が大いに上がっている。
- AFRICOM 計画報告
- アジア太平洋地方代表部報告
カルカッタに本部があり、代表 S. S. Biswas 氏が報告。
アジア・太平洋地区の専門職の名簿作成
教育と文化活動国際委員会 (CECA) の会議開催
第2回専門職研修の実施
文化交流の実施

- ラテンアメリカ，カリブ海地方代表部報告
- イコム財政報告
- イコム規約の修正
- 3年計画の採用
- 決議の採用
- 名誉会員の任命
- イコム監査役の任命
- イコム新会長の就任

以上の報告及び提案に関しすべて承認された。

- 次期大会（第18回イコム大会）の開催地はメルボルンにおいて1998年10月10日～18日で開催することが決定された。

5. イコム10ヵ年計画

イコムは1995年～2004年に下記の6目的を主として取り上げる。

目的1 社会及び文化を発展させる機関としての博物館を支援する。

博物館は過去20年間に前例のない程増加し又影響力も増大した。その理由は新設、分割、入館者の増加、新しい責務に対応する活動の多様性に基づく。従来は、博物館はコレクションと保存がその使命と考えられたが、現在は地域社会へのサービス及び発展の為の施設となっており（イコム規約）、社会変革の為の施設である。

人類存続の証人としての博物館の技術的發展は過去の遺産につながり、それが統合され、調和されて発展して行くことを予想させる。

過去の遺産を保存し、啓発することにより、博物館は地域の人々の文化的同一性の保護者としての役割を持っている。情報と普及のセンターとして博物館は理想的な社会教育機関である。

社会施設として博物館はその大多数社会及び少数社会の双方に大きな役割を果たす。

最後に博物館は文化産業、観光、美術市場各種の財政的効果をあげ得ることが論じられている。

この新しい見通しは2000年に向けての文化政策を立てるにあたって全博物館界によって明白に指示されるべきである。

目的2 職業倫理規定の実施を支援するとともに、文化遺産、自然保護の国内的、国際的立法化を促進する。

1986年の第15回総会においてイコム職業倫理規定が承認された。同規定は博物館職員の為の国際的基準である。これは公私立、専門、一般を問わず広く普及すべきである。各イコム国内委員会はその会員への周知につとめ又これに関連する国内規定の制定をはかるべきである。

イコムは倫理規定の開発と促進、国内及び国際立法への特段の努力をすべきである。これには文化財の収集・獲得・移動への倫理規定の適用の促進、規定に対応する国際基準の確立、文献交換情報（主としてユネスコイコム情報センター、イコムニュースを通じて）、国際警察機構（INTERPOL）への協力、等を含む。

1970年のユネスコ大会で大枠が決められ、1986年のイコム大会で承認され

た「文化財の所有権の違法な輸出及び輸入の禁止条約」は60ヵ国で批准された。イコムは国内委員会を通じて、イコム職業倫理規定に応じて、その国内立法化を促すよう努めている。

文化的コレクションの目録の整備に力を注ぐべきである。

最後に、イコムは国際的に価値のある可動文化財の保護に関する条約の確立に努める。

目的3 地域協力、国際協力のネットワーク整備への努力

1946年以来、イコムの専門家は国際的レベルに於いて専門家活動を通じて世界遺産の保存に貢献して来ている。

この難問を遂行し、一般に理解させる為に、イコムは専門家の交流—国内委員会相互、博物館相互、個人の交流—を促進しなければならない。

イコムは地域的研修を促進すべきである。これらの研修の期間は数週間で一般的な博物館研修、地域的博物館問題、文化財、自然遺産に関する研修は勿論の事、特殊問題も取り上げるべきである。この研修は博物館専門職及びその国々の文化界関係者（遺産、遺跡、自然公園関係専門者、行政関係者等）も含むべきである。

目的4 文化及び自然遺産の防御、保存機構の確立

1954年制定されたハーグ条約、「軍事的紛争における文化財の保護」条約のユネスコへの適用を特に要請すべきである。

イコムは世界の何処で起ころうとも文化財の保護の役割を果たすよう努力すべきである。それに伴い、イコムは会員の声を聞き、とるべき行動等の手段等に衆知を集めなければならない。それを効果的に行うため、各場合に対応できるよう、出来る限りの国際的、国内的協力をはかるべきである。イコムは自然遺産の悪化に特別の関心を払うべきである。

目的5 博物館が直面する経済的自由化傾向に対応すること。

多くの政府や国際機関は政策又は経済的理由等により実行されている経済自由化政策と処置の下において政治と公共サービス機関との伝統的な関係を根本的に変えようとしている。かかる変化は或る場合には博物館の中には生き残りに脅威を与え又すべての博物館及び専門職に重大な影響を与える。この3年計画の関間でイコムはこの変化を十分に調査する。

イコム及びその関連機関は国及び地方の政策を監視し、対応しながら、現在の博物館及びその価値の保護に努める。

目的 6 博物館との間の総合的情報ネットワークを拡充すること。

現在は社会のすべての分野に於ける情報技術は進展し、日常に於ける使用者の利用手段、需要技術は日進月歩である。

博物館は知識の普及、アイデアの伝達方法の改善に積極的に参加しなければならない。

インターネットの如き情報技術を効果的に接続する手段についての調整とアドバイスが必要とされる。

イコムは新しい通信及び情報技術やシステムによって提供される機会に積極的に対応すべきである。そして情報通信、知識分野における NGO の戦略的提携“東京決議”に積極的な役割を果たすべきである。

6. 総会決議

博物館と地域社会

各国政府は地域社会における文化サービスと地域向上に役立つ機関として及び各地域社会の文化的遺産を収集・管理する特殊な施設として博物館を認識し、支援する事を促進する。

産業的建物と地域を博物館のスペースとして採用して、人々の情報影像、記録、催物、活動とその資料及びこれらの資料に示される地域社会の斗争、出来事、発達過程の保存に特に配慮することを勧告する。地域社会にサービスしている博物館と博物館学のための人間性に関係する又技術的、経済的、情動的活動についての人的、物的資源、機会、弱点、ニーズ等に配慮して、計画の実行及び国内委員会、地方代表部のプロジェクトの開発戦略を促進する。

武力的紛争間における文化遺産の保護

武力的紛争間における文化遺産の故意による如何なる破壊も強く批難する。

将来の世代のためにサラエボにおける国立博物館とそのコレクション及び残存するコレクション（貴重で、移すことのできない科学資料）の保護に危険な状態にもかかわらず努力して博物館職員に対して注意を払う。

武力的紛争間における破壊及び損害の危険にあるすべての博物館に精神的、实际的、財政的な支援をするよう政府、国際機関、個人に呼びかける。

サラエボの国立博物館の如き苦境にある博物館を援助するため、例えば国際博物館デーで集った募金等の援助資金を博物館界で提供することを勧める。

リベリア、ブルンジ、ルワンダ等における博物館及びその職員の状況調査団の派遣を事務局長に要求し、イコムが上記の様な使節を適宜派遣出来るよう努力する。

文化的遺産の物理的、法律的安全を規定する協定

1995年の Unidroit（国際機関及び国内法の統一化国際機関）における文化財の盗難及び不法取引に関する決議を支持し、博物館において不法取引問題について国民の意識の高揚に努め、11月22日を文化財の不法取引に関する国際デーと定めて、その改善に努力することを提言する。また各国政府に1970年に締結された「文化財の不法輸出入、所有権の移転の禁止に関するユネスコ協定」、及び新 Unidroit 協定を早急に批准し、国内法については諸条項を整備するよう勧告する。

イコムはこの Unidroit 協定を全面的に支援し、専門家の配置を検討するとともに、これらのコレクションの複製製作の制限について、博物館の権利保護の手段を

研究する事を要求する。

博物館研修と地球的存在の自覚

すべての研修実施者は博物館の研修は環境的自覚を含む文化的、自然的遺産に関するものは勿論、人間社会と地球上の資源とのバランスの保護、維持を対象と考えるべきである。

すべての研修実施者は博物館の研修は組織的な教育に限ることなく、博物館界は世界的であることを認め、公開討議、アイデア、理論等の自由支援、実習等により及び利用し得るすべてのメディアを利用するなどして推進することを計るべきである。

イコムはすべての政府は人間及び環境に関する遺産の保護、保存についての概念と実践は公衆教育、情報、啓発の各目的を統合するものであることを認めて、最高レベルの施設を建設するよう勧告する。

7. イコム アジアパシフィック機構会議報告

スタバンガーにおける3年計画

イコムアスパック会議議案

場 所 ノルウェー スタバンガー

期 日 1995年7月2日～4日

7月2日

0 議案の採用

1 3年計画（1992～95年）の審議

7月3日

各地方代表部とヨーロッパグループとの委員長、事務局の合同会議

2 3年計画（1995～98年）の審議

7月4日

3 アスパック執行委員の選出（1995～1998）

4 3年計画（1995～98年）の作成

5 アスパック予算の審議

6 その他

アスパックの（1995～98年）の提案

1. アスパック地域内のドキュメントのコンピュータ化と情報交換。
2. 異った博物館で使用される専門用語の規格化。
3. 地域内の3個国で博物館でワークショップを実施し、専門職員の交流を促進する。
4. 文化財の不法取引の防止及び略奪品の原産国への回収の促進し、その活動を期間中の会議に報告する特別委員を任命する。

決 議

1. アスパック地域内の博物館はその博物館コレクションの目録の完成を優先事業とすべきことを提案する。
2. イコム活動に一層実りある参加をするために、アスパック内から今後のイコム会議及び各種国際委員会に於て発言し、発言書提出の促進を計る。イコム財政源の増加を計る為にアスパック地域内における重要な計画を実行して寄付金の増加を計る。

8. 第17回イコム大会に参加して

小 山 博 滋

国立科学博物館植物研究部長

首都オスロの南西約500キロの所にあるノルウェーの第4の都市、スタヴァンガー市で開催された第17回イコム大会にイコム日本委員の代表団の一人として参加する機会が与えられた。これはその報告である。

イコム (ICOM) は International Council Of Museum の各語の頭文字を綴ったもので、“博物館の国際会議”である。具体的には世界中の色々な国の博物館職員が集まって博物館に関するあらゆる問題点を討議する場である。世界大会は3年に一度開かれることになっており、1992年には第16回大会がカナダのケベック市で開かれた。イコムに参加している国は現在120ヵ国余りである。各国にはそれぞれの国の委員会があり、その委員は大会中に開催される諮問委員会や総会などでの発言権や投票権が認められている。また、世界をいくつかのブロックに分けて、地域機構をもたせている。日本はアジア太平洋機構 (アスパック) の一員である。

スタヴァンガー市は1120年代に建てられた聖堂を中心に開けた都市の一つである。現在人口は14万、ノルウェーの北海油田産業の中心地である。永い間人口は殆ど増えなかったが、漁業の集積港として、また北海油田の発掘などにより近年急速に人口が増えたと云う。街並は清潔で、美しく、住宅は緑に囲まれている。窓の内側に草花の鉢植えを置いた家が多い。マロニエの街路樹はすでに花が終わり、セイヨウシャクナゲが庭を飾っていた。

7月1日 (第0日目)

参加登録を済ませると、色々な書類の入ったナップザックを貰う。それにはバイキング時代の船を図案化した絵がプリントされている。参加者名簿によると、登録されたのは97ヵ国から約1300名である。当日の受付にも多くの人々が列をなしていたので、総勢は2000名を超えたかも知れない。日本からはイコム日本委員会代表団の5名 (植木国立近代美術館長、毛利日本博物館協会専務理事、新妻日本博物館協会総務部長、河野東京国立博物館渉外係および私) を含めて16名の方々が参加された。

さっそく諮問委員会に出席する。午前の同委員会では1992年から今年までの総括が報告・討議され、承認された。午後には会則の変更に関する議題をめぐって討議される。夕方から市内の海鮮レストランで自主参加のパーティが開かれた。あちらこちらに数人ずつの集まりができ、3年振りの再会を喜び合って、賑わっている。

時計は11時(夜)を過ぎているのに、窓の外は昼間とかわらない。これぞまさに白夜であった。

7月2日(第1日目)

ホテル前に大会会場行きのバスが来る。昨日貰ったナップザックを背負った人達で会場は賑わっている。オープニング・セレモニーは女王陛下の御臨席のもと、厳かな中にも華やかに進められた。イコム・ノルウェー委員会会長とイコム会長の歓迎の言葉に続いて、ソウニャ女王によって開会が宣言された。歓迎の挨拶の間には民族衣装の女性によるソロや器楽による演奏が入り、とてもすてきであった。また、“博物館と社会—国家崩壊時期における博物館の役割”と題した基調講演はまさに戦火にあるボスニア・ヘルツェゴビナやルワンダに於ける博物館の役割を問うものである。昼食には女王陛下も参加され、民族衣装の男性合唱団が大会場を賑わせた。

イコムでは博物館を“社会とその発展に貢献する非営利・常設公共施設であり、研究・教育・楽しみの目的で、人間とその環境に関連する物的証拠を取得、保存、研究、伝達、展示する公開の場である”と定義する。具体的には(i)自然、考古学、民族学上の遺物、遺跡、史跡および人間とその環境に関連する物的証拠を取得、保存、伝達する博物館的性格を有する場、(ii)植物や動物の生きた標本を収集・展示する植物園や動物園、水族館や自然生物園、(iii)科学センターやプラネタリウム、(iv)図書館や公文書センターの常設・保存公共施設や展示ギャラリー、(v)自然保護地などである。このように一口に博物館と云ってもその幅は広い。そのためイコムには専門分野別の国際委員会が、現在24部門認められている。

午後には専門分野別の国際委員会が幾つか開かれた。そのうちの一つ、自然史の博物館と資料収集に関する国際委員会(Nat Hist.)に参加する。テーマは最近の生物学分野でしばしば取り上げられているトピックス“生物の多様性”である。多様性をどう取り上げるのかや、どのように表現するのかといったもので、それは同時に危機に瀕する種をどのようにして保護するのかを問うものでもあった。

夕方から開かれた地域機構アスパックの会議に参加した。第16回大会以後アスパックとしておこなってきた報告が、参加各国の委員会から行われた。また、3年後にメルボルン(オーストラリア)で開かれる第18回大会へ向けての足固めのための討議がなされた。

夜には地元で活躍するブラスバンドによる演奏を含む歓迎レセプションに招待された。終わったのは11時だったが、外はまだ十分に明るく、昨夜に続いて白夜を経験した。

7月3日（第2日目）

午前、諮問委員会に出席する。会場では会長、副会長、出納官など執行部役員の選出に関する改訂案をめぐる議論が続く。議論が一息ついたところで、植木館長がイコム日本委員会を代表して、神戸地震について各国のイコム・メンバーからいただいた励ましや援助に対してお礼をのべる。

午後、企画・教育、民族、器楽と自然史の4専門部会によって企画された合同セッションに参加する。それぞれの専門部会から話題提供される。ロンドン市内の移民に関する移入の調査結果と展示効果と題する話題には多くの反響があった。

7月4日（第3日目）

午前、Nat Hist. に出席。カナダ博物館における組織についての話題では、企画サイドと研究者サイドとの調整が重要とのこと、いずれも同じか。‘後継者の養成は？’との私の問いに‘今後の重要な課題’という答えがかえってきた。

午後、フィヨルド見学。水深がかなりあるとみえて、水はあくまで青く、とても美しい。岩からなる島の尾根にはマツが、少し平らな所にはトウヒが見える。垂直に切り立った岸壁に近づき見上げる。高さが600mに達するという。観光案内にはこの岸壁の平らな頂上の写真が出ている。

夕方から開かれたアスパックに出席。日本がアスパックの執行委員になることが決まる。3年後メルボルンで開かれることになる第18回イコム大会にむけて、取り組む方針を採択する。

7月5日（第4日目）

午前中休息。午後会場に出かけ、オープン・フォーラムに参加。夕方、Nat Hist. に参加。スタヴァンガーから南東30キロほどの所にある海岸保護区の案内センターで開かれた“夕食会とアイデヤ市場”に加わる。この企画はノルウェー自然史博物館協会とスタヴァンガー自然史博物館の合同でなされた。センターについたのが7時半、海岸まで散策にでる。見かける植物は種類こそ置き換わってはいるものの、北海道の海岸の植物によく似ている。保護区は海岸沿いに約300キロにわたるという。スライドを用いた説明が終わったのが9時。そして夕食。外は雨、いつになく暗い。暗さが引き金になったのか、やけに眠い。睡魔に襲われる中、“アイデヤ市場”が始まったが、話が断片的になってしまい、殆ど覚えていない。バスが迎えにきたのは11時半、ホテルに着いたのは12時半。雨天であることもあって、この夜の空には闇が現れ、街の明かりがまぶしく感じられた。

7月6日（第5日目）

エクスカーション“自然と博物館および自然とふれ合う”に参加する。スタヴァンガー市から南に直線距離にして100キロあまりのところにあるエゲルスンド市を往復するコースである。往きには海岸沿いが、帰りには内陸の道がとられたバスツアーである。途中ハマナスの花をよく見かける。ハ・ガムル・プレステガードでは、石器時代の展示があり、海岸には鉄器時代の墓地が保護されていた。また、氷河に関する展示では今から15000年前にはスカンジナビア半島はすっかり氷河におおわれ、デンマーク、フランス、イギリスなどと地続きであったと云う。12000年前になると、氷河が後退し始め、しだいに海域が広がり、8000年前には氷河もすっかり消えて、現在の地形になったと云う。ダラネ・フォーク博物館では、エゲルスンド市の市長の歓迎をうけ、お茶とケーキが振る舞われ、子供達によるフォークダンスが披露された。

7月7日（第6日目）

午前、総会に出席。イコム次期会長にインドのゴーシュ博士を再選する。最後にノルウェー委員会から次期開催地のオーストラリア委員会へ大会旗が手渡され、第17回大会は6日にわたる会議を閉じた。7日間朝から夜遅くまで、人々の集いは精力的に続けられた。初めてながら互いに理解しあった人達や、3年ぶり更には6年ぶりに再会した人々も大勢いたように見受けられた。専門部会で得た新しい考えや工夫をもって帰途につく人も少なくないはずである。そういう人達の思いが鳴りやまぬ拍手に表れていた。また、今なお戦火にあるサラエボ・ヘルツェゴビナの博物館職員によるレポートは平和への道の大切さを訴えるものであった。

午後、諮問委員会に出席。次回の世界大会までのアクション・プランが討議され、予算案が提示された。財政は必ずしも十分でなく、先進国の助成金を求める案が提出された。議長から数ヵ国に対して呼びかけられたが、即応する国はない。日本も現状ではいかんともしい状況である。

夜8時から市内にあるミュージック・ホールで開かれたさよならパーティに参加。スタヴァンガー地方のフォーク・ダンスと民謡を楽しむ。9時半、会場をホールに移して、夕食会となる。最初の日と同じように、あちらこちらで小人数の集まりができる。また、庭に張られたテントでは音楽が演奏され、ダンスを楽しむ人達でにぎわっている。後ろ髪を引かれるおもいで、10時半会場をあとにした。その夜もまた白夜であった。

国際委員会の活動

ICOMON（貨幣博物館）委員会に参加して

大久保 隆

日本銀行金融研究所貨幣博物館課長

(1) ICOMON 国際委員会の概要

ICOMON (International Committee for Money and Banking Museums) は、貨幣（コインおよび紙幣）の博物館に所属する ICOM メンバーのうち貨幣学 (Numismatics) を扱う研究者ないし研究機関が構成員となっている委員会である。

現在メンバーは57 (Institutional members 6, Individual members 51) で、参加国の地域別内訳は、西欧37, 東欧・中欧8, アジア5, 南ア3, アフリカ2, 北米・オセアニア各1となっている。

ICOMON の目的は、Numismatics (貨幣学)、経済史、財政・金融史ならびに貨幣鑄造、偽造防止等の印刷技術に関する協力、情報交換を行うこととされている。

ICOMON は毎年1回持ち回りで会議を開催することになっているが、Numismatics に関係する各国の博物館を訪れ、実際に展示されている標本等を見ながら様々な議論を進めることは、博物館運営の観点ばかりでなく、貨幣研究という観点からも意義深いことと思われる。

なお、コインを中心とする貨幣研究はこれまで主としてヨーロッパが中心であり、事実コインの歴史はギリシャ・ローマ時代の古くから始まっているが、近年アジアにおける貨幣研究に目が向けられてきており、中国、日本を初めとする国々のコイン、紙幣に対する関心は非常に高まってきている。

(2) ノルウェー・スタヴァンガー大会での討議内容等

本年7月のノルウェー・スタヴァンガー大会における ICOMON の総会で取り上げられたテーマは、Conservation (展示物、貨幣標本の保存、維持・管理) および Display (博物館の展示) の二つ。

まず Conservation については、コイン、紙幣および関連古文書類の保存や博物館での展示上生じる様々な劣化への対応が検討された。博物館展示ケースの湿度が高すぎると、コインは錆が発生し、表面が汚れると同時に表層が劣化し、紙幣はある程度の湿度が保たれないと乾燥による劣化が進むことになる。こうした素材による影響の違いは、博物館での展示や保存が素材の性質ごとに区別されて行われなければならないことに繋がるが、現実にはコインと紙幣を比較する展示も必要であり、

こうした状況に如何にして対処するかについて各国の博物館が行っている方法が披露、検討された。

また、特に古代貨幣（主としてコイン）は、遺跡から出土するものが大半であるが、土中でかなり劣化している状態で土等が付着している場合、これをどのような方法で復元していくかという問題が議論された。最近の科学的手法を駆使すれば、表面の汚れ等は化学的に処理できるが、それがコインそのものにいかなる影響を与えるかを十分認識した上で処理しないと、コインまでもが化学的に処理されてしまうことになりかねない。いくつかの具体的な処理例をスライド等で比較検討しながら、各博物館における手法が検討された。

また、標本として一応の処理がなされた貨幣を展示していく場合、上記湿度、温度に加えて博物館内の照明等の光が標本を劣化させる可能性についても議論が行われた。きちんと処理された標本が展示によって劣化しないようにするためには、例えばアクリル樹脂のようなものでコーティングする方法が考えられるが、その際にもアクリル樹脂自体が標本を劣化させる可能性はないのかという問題が新たに発生する。これらは化学的な分析による検討も必要であるが、博物館内の様々な環境条件によって、その影響もいろいろあるので、実例をもって検討を進めることもまた重要であるとの議論が行われた。

一方、Display に関しては、いくつかの貨幣博物館が現在実際に行っている展示方法およびそのコンセプトについての紹介を行い、議論が行われた。貨幣の展示については、その国の貨幣の歴史を中心に展示を行うというのが大きなコンセプトとなっているが、各博物館からは、国際的な関連を重要視し、当該国だけの歴史ではなくその国に影響を与えた国の貨幣史にも十分配慮することが必要との意見が多く出された。そうした意味では、参加各国がそれぞれの標本を相互に交換して展示したり、場合によっては出張展示を企画することが有効であり、またこれまで以上に研究成果の国際的な情報交換を進めることが今後ますます必要となるとの認識で一致した。

以上のテーマに関しては、会議での議論を踏まえた上で、ノルウェー（スタバンガー）所在の博物館（Sparebanken Rogaland Bank-musset, Archeological Museum, Stavanger Museum）を訪問し、展示方法を実際に見学すると共に、それぞれの博物館における標本類の保存、維持・保管（Conservation）の実態についての説明を受け、意見交換を行った。

(3) 会議に参加しての印象等

日本銀行貨幣博物館は本年 ICOM へ参加し、ICOMON 国際委員会へは初めて参加したわけであるが、まず ICOM 総会で何よりもヨーロッパを初めとする諸外

国における博物館活動の位置付けが非常に高いという意味で文化的水準の高さを感じざるを得なかったというのが正直な印象。その ICOM の専門委員会のひとつである ICOMON は、貨幣研究（これは単に貨幣を収集・整理して展示するばかりではなく、貨幣の学問としての Numismatics の専門的研究までを包含する）の分野で著名な研究者が熱心に議論する場である点に非常に感銘を受けると共に、参加したことの意義の大きさを感じた。

博物館の運営はただ単に珍しい標本、貴重な逸品を見せることに意味があるのではなく、その貨幣博物館が扱う対象について実物を紹介すると同時にそうした対象に関する正しい理解が得られる場を提供するものでなくてはならないと思われる。したがって、貨幣なら貨幣に関する様々な情報（実際の貨幣ばかりでなく関連する資料類も含む）を的確に提供し、学問として、あるいは文化としての Numismatics を継承していく機関として機能することが要請されていると考えられる。そうした役割を担った博物館同士が共通に抱えている問題、あるいは個別の特殊な問題の解決のために意見交換することには大きな意義があると考えられる。もちろん、年に一度、一堂に会して議論することも有効であるが、そうした機会を通じて築かれる情報ネットワークを活用して様々な博物館がコンタクトを続けることがより重要と思われる。日本銀行貨幣博物館は中央銀行として貨幣に深い関係を持っており、ICOMON メンバーにも各国の中央銀行関係者が名前を連ねているが、ICOMON 自体は中央銀行関係者の集まりではなく、むしろ民間の貨幣研究分野で著名な博物館、研究者が積極的に活動が続けている組織である。貨幣は世の中で信認を得て使われることによって初めて貨幣として意味を持つわけであり、わが国においても広く民間の貨幣研究機関が ICOMON のような国際的な組織に参加され、活動の輪を広げることを切に願う次第である。

なお、今回の ICOMON 会議にはアジアからは中国と日本の 2 か国だけが参加した。会議の席上、参加メンバーのアジア諸国の貨幣に関する関心は非常に高く、討議された多くの論点に関して実情の説明が求められた。現時点では、日本から ICOMON への参加を表明しているのは私共日本銀行貨幣博物館だけであり、今後日本の貨幣に関する情報をより多く提供していくためにも、また博物館活動の一段の国際化を進め、貨幣研究を充実させていくためにも、他の国内貨幣関係博物館の同委員会への積極的な参加が期待される。

コスチューム委員会の活動

深井 晃子
京都服飾文化研究財団

京都服飾文化研究財団が設立された時、同じ道の先駆者であったNYメトロポリタン美術館コスチューム・インスティテュートの方々には様々な面から多くの助言をいただいた。その時の助言のひとつがICOMの専門委員会に入るようにということだった。以来、それこそ弱小の研究所である私たちは、ICOMの服飾・テキスタイルの専門部会であるコスチューム・コミティーに定期的に参加している。数少ないアジア人という点も加わって、メンバーにはすっかり顔を覚えてもらった。

このことは、私たちが大掛かりな展覧会を開催する際の極めて重要なことであった。私たちは、展覧会を日本の多くの美術館が行っているように、新聞社などとの共催という形で行ってはいない。展覧会の規模が大きくなればなるほど、自己の収蔵品のみで展示が完結するということは少なくなるのだから、他館からの借用品が重要な部分を占める。弱小の私たちが世界に名だたる大美術館に、全く金銭問題を伴わない借用の要請状を書く際、コスチューム・コミティーへの参加がどれほど役に立ったか知れない。こうした借用は世界の博物館の常識的なルールに則って行われるのだが、それにしても私たちの場合は、おそらく日本の組織としては例外的にスムーズに行っているというべきかもしれない。私たちは将来は美術館というハコを持ちたいと願いながらも、その過程においてまず、収蔵品の充実が最重要というポリシーのもとに収蔵品の充実を図ってきた。その結果、最近は海外から収蔵品の借用依頼を受けることも数多く、しばしば貸出しに応じている。

1989年の9月に行われたICOMハーグ大会におけるコスチューム・コミティーの研究テーマは、「衣装展示とマネキン」だった。その折、同年4月に京都国立近代美術館と共催した「華麗な革命」展について発表してほしいとの要請があり、私はゲストスピーカーとして招かれた（博物館研究 Vol. 24, No. 11参照）。この時発表した私たちの斬新な衣装展示と綿密なマネキンの準備は、参加者に大きな興味を引き起こしたように思う。特に衣装展示専用に開発したマネキンは、大きな反響を呼んだ。現在、衣装はその美しさが最もよく理解されるよう、マネキンに着装させて展示する方法が広くとられている。従ってマネキンは展示の重要ポイントとなるが、時代によって変化するファッションは、衣装と共に女性の体型をも変えたので、それに対応するマネキンが必要となる。そのため、18世紀、19世紀初期、19世紀中・後期、1900年前後に対応する四つの時代別マネキンを、各時代の衣装の実寸から割り出したサイズに基づいて製作した。また、このマネキンは身体各部の関節が

折り曲げ可能で、人間に近いポーズを作り、細かな表情を演出することができる。時代の推移に伴って変遷を遂げた衣装のシルエットに的確に対応し、しかも美しく見せることができるため、その後世界中から問い合わせを受けるようになり、大美術館でも私たちのマネキンをしばしば目にする程になった。現在、パリのパリ市立衣装美術館、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、NYのメトロポリタン美術館をはじめとする13ヶ国45館の海外美術館で採用されている。

1994年には京都国立近代美術館と共催で「モードのジャポニスム」を開催したが、この時期に京都でコスチューム・コミティーの年会をとという要請が起こったのである。それは、京都の桜ばかりではなく、世界の関係者から注目された先の展覧会に続く、「モードのジャポニスム」という、日本で西欧の服飾文化を研究する私たちならではの展覧会のテーマ自体への興味もあったのだらうと思う。コスチューム・コミティーは小規模なミーティングではあるものの、私たちが国際会議をホストするなど考えてもみなかった上に、時期も展覧会を開いた直後の混乱の只中にぶつかることになる。どうなることか見当もつかなかったが、結局その要請を受け入れたのである。

大掛かりな資金を当てにする会議規模でもなく、また展覧会準備に手一杯で外部と交渉する時間的余裕もなかったから、文字通り手作りの会議となった。しかし参加者は、欧米からの遠さ（旅費の高さでもあり、日本の物価の高さもある）にもかかわらず、ロシアやハンガリー、ポルトガルからの参加者も含めて、最終的に予想をはるかに上回る、コスチューム・コミティーとしては極めて多い59名という参加者数となった。そして会議が終わった時、参加者たちは最大級のねぎらいの言葉を残してくれた。それは私たちに会議の成功を確信させ、疲れを吹っ飛ばしてくれるものだった。会議が終わった後、参加者から「忘れられない京都会議」と多くの礼状が届いたことは大きな喜びであった。

1995年、ノスウェーのスタバンガーで行われた年次大会は、ノルウェー王妃が開会式へ列席され、白夜の季節、北海油田で急速な発展をみせる北海に面した小都市をあげての国際会議となった。コスチューム・コミティーは、全体会議の前後、オスロ王立美術館でプレ・コミティー、デンマークのコペンハーゲン王立美術館でアプレ・コミティーが行われた。今回参加したのは会員の17か国の36名と、非会員の6名であった。今回のテーマは「民族衣装とその展示について」だったから、民族学、民俗学系の博物館の会員も多いから、特に広い関心を呼び、熱心な発表が続いた。ミュージアムの見学も、オスロ、スタバンガーのほか、コペンハーゲン、スウェーデンのランドと広域に及び、それぞれの民族衣装や王室の衣装といった北欧ならではの収蔵品を見ることができた。会議の終わりには、運営委員の一人として私が推薦され、来年からの3年間の任期を引き受けることになった。

現在コスチューム・コミティーは、委員長、副委員長、広報、会計の4名の運営委員を筆頭に、40ヶ国の会員255名と、法人8団体から構成されている。うち、日本は、会員6名と私たち1団体である。コスチューム・コミティーは毎年会議を開催し、機関誌「コスチューム・ニュース」と会員名簿を発行している。「コスチューム・ニュース」には、年会の報告や次回年会の案内、世界各地で行われる展覧会や、関連する出版物の案内が掲載され、衣装展の世界の状況を把握するのに役立っている。隔年発行の「ガイドライン・フォー・コスチューム」は、文字通り衣装の保存・補修や展示にかかわる国際ルールを詳細に載せ、衣装展示の重要な指針となっている。こうした従来の活動のほかに、現在、文献目録の編集が進行している。またコスチューム・コミティーの近年の大きな課題は、コンピューターの急速な普及に伴い、多くの美術館が収蔵品データのコンピューター化を進めているという状況の中で、今後、専門用語の新たな分類、統一が必要となっているため、その見直しが進められている。私たちもこの問題については、国際的な視野に立った整備をしていくつもりである。

日本の美術・博物館は、これまで設立時に多大な費用をかけて建物を作ってきたものの、その後の収集や研究には適切な指針、それに伴う予算取りが行われないう残念な現状も聞く。私立の研究所として17年前に出発した私たちの財団は、まず収蔵品の収集、研究から着手し、そして、その成果の発表という、日本では逆だが、世界的にみてごく通常的美術館誕生の順路を進んできた。一つの展覧会を開催するごとに、少しずつ知識を増やし、経験を積み、外部からの評価も高まってきた。その過程において、ICOMという国際的な組織の一員として培われた人的コミュニケーションは、私たちの活動においてどれほど大きな力となったかしのれない。

CIMAM（現代美術）委員会総会を終えて

原 俊 夫
原美術館館長・CIMAM 副会長

CIMAM（Comité International des Musées d' Art Moderne et Contemporain）とはICOMの分科会の一つであり、世界中の主要な近代美術館の館長および主任学芸員から構成され、美術館関係者が個人の資格で登録するものとしては最大の国際組織です。会員数は約260名、準会員や特に現代美術に関係のない会員を含めると総会員数は約500名に達します。

CIMAMは毎年世界各地で会員と関係者の会議を開催し、独自の組織（理事会、小委員会）とプログラムを持ち、アクティブな活動を続けてきました。シンポジウ

ムやレクチャー等を行うことで、美術館についての問題点や将来の展望を、ひいては美術を通しての社会貢献について論議し、あるいは情報交換なども行っています。同時に会議開催国の美術や文化状況の視察を重ね、また積極的な人的交流を交えながら、美術館の枠にとどまらない広範囲なプログラムを推進し、各国文化の相互理解に寄与しています。国境を超え、アメリカやヨーロッパをはじめ中南米、アジア、特にロシアや東欧などの旧共産圏の現代美術館員を網羅している組織は CIMAM のみであり、従って現代美術館相互の連絡機関としても重要な役割を担っています。

昨年秋、これまで主に欧米諸国にて開催されてきた CIMAM が、日本で行われました。アジア地域では初めての開催であり、その意義は大きく、国内外から広く関心が寄せられました。現代美術はやや西欧一辺倒というのが従来の傾向でありましたが、近年は西欧文化に加えて、東洋など他の地域文化に対する興味や評価が高まりをみせています。CIMAM 東京総会では、美術館の西欧中心の考え方からいかにグローバルな視野に立ったコレクションや企画ができるか、また、強いてはそれがこれからの美術館と社会の関わりの基本となるのではないかなど問題が真剣に討議されました。その結果である“東京決議”とは、次のようなものです。「美術館の健全な活動のためには、美術館の美術に関する専門的な判断の独自性と、その決定権の保全が不可欠であることは、一般的に認識されている。しかし、この自明の事実にもかかわらず、専門的見地を持つ人々以外からの介入が美術館の品格を脅かし、また美術館が負っている一般社会やアーティスト、そしてアートそのものに対する責任を危機に陥れる状況がしばしば起こりうるし、また現実起こっている。そのような場合、CIMAM は必要に応じ、美術館の権利と義務を擁護し、美術館の運営に法的、経済的責任を負う人々と CIMAM の会員一人一人に対し、上記の原則を再認識するよう呼びかけるものである。」

今年度の CIMAM 総会は、スタバンガーで行われた ICOM 総会を機に、1995年7月1日～7月6日の日程で、スタバンガー、ベルゲン、オスロで開催されました。

出席者は62名であり、主なメンバーは、シュテデリック美術館館長（オランダ）、レイナ ソフィア美術館元館長（スペイン）、パリ市立美術館館長（フランス）、キューバトリエンナーレ組織委員長（キューバ）、ルイジアナ美術館館長（デンマーク）、シドニー現代美術館館長（オーストラリア）、アントワープ現代美術館館長（ベルギー）、オスロ現代美術館館長（ノルウェー）、バーゼル現代美術館館長（スイス）、ヘンリームーア美術館館長（イギリス）、ヘイワード美術館学芸部長（イギリス）、ソウル国立現代美術館元館長（韓国）、ソングジェ美術館館長（韓国）、ニューヨーク近代美術館国際部長（アメリカ）、パンザコレクション（イタリア）の Panza 伯爵でありました。なお、日本からは私と、原美術館主任学芸員の2名のみ出席でした。

プログラムは、スタバンガーで3日間過ごした後、ベルゲン、オスロに滞在、7月1日から6日までの日程でした。初日の7月1日は、ソニヤ王妃との夕食会。2日目はICOM オープニングセレモニー後、第1回のワーキング セッション。3日目はサンドネス市当局による昼食会、その後サンドネス美術館とローガランド美術館を見学。4日目はベルゲンへ移動し、ベルゲン市議会による昼食会。市内の美術館を見学。その後、オスロへ移動。5日目は第2回ワーキング セッションの後、国立現代美術館やアストラップ フィンレイ美術館、ステネーセン美術館、ヘニーオンスタッド美術財団などを見学。6日目は第3回ワーキング セッションの後、ムンク美術館やアウラ大学内のムンクの壁画を見学。夜はオスロ市によるレセプションとオスロフィヨルドでのフェアウェルパーティなど、盛り沢山でした。

会議のテーマは、例年にも増して意義深いものでした。テーマとなった事項は第1に、日本での総会のテーマを引き継いで、現代美術とアイデンティティの問題。今日、欧州の一員でありながら主流からは一線を画し独自性を持つ北欧、その現代美術が果たすべき役割。第2に、北欧3国（ノルウェー、デンマーク、スウェーデン）の作家によるプレゼンテーションとディスカッション。第3に、CIMAM の運営方法、特に「東京決議」を効果的に活用する方法について。また、役員選出などその他の会議事務などを討議しました。

以上のような、中味の濃い内容のプログラムを終えての、幾つかの感想を申し上げます。

まず、1日目に夕食会で一緒にいたソニヤ王妃は、現代美術についての造詣が深く、また、日本にも皇室の招きで来られており、日本の現状についてもかなりの知識を持っていらっしゃることに感服しました。単に象徴としてICOM 総会に出席されたのではなく、御自身の専門分野と興味を追求する努力をされている姿に、大いに感銘を受けました。

第2に、北欧の作家達の中では、ノルウェーのムンクをはじめとする世界的な大作家も見られますが、今回出会った現代美術の作家達による作品の大部分は、初めて目にするものがほとんどでした。しかしながら訪れた美術館をはじめとする各文化機関はすべて、自国の文化を育成しようとする情熱に燃えており、その姿勢には非常に心を打たれました。

第3に、日本ではあまり知られていなかったCIMAM ですが、昨年の日本総会を機に広く認識されるようになり、日本をはじめアジアからのメンバーもあらたに加わり、そのうち韓国から3名が今回の総会に出席しました。現代美術はその性格上、国際的なスケールでの活動や相互の交流が不可欠であります。日本の専門家の、CIMAM へのより積極的な参加を大いに期待するところであります。

自然史国際委員会（NATHIST）に参加して

中 川 志 郎

ミュージアムパーク茨城県自然博物館館長

はじめに

総会と自然史国際委員会に今回初めて参加した。世界的な規模で変革しつつあるといわれる社会教育施設の有り様について、国際的な傾向を直接に把握したかったからである。又、茨城県自然博物館は1994年11月にオープンしたばかりの新しい自然史系博物館であり、定めた運営方針が国際的な潮流に則して合致したものの可否を知ることもひとつの目的であった。111ヶ国から1,500人をこえる関係者の集まりはさすがに圧巻で、総会、国際委員会を通じて、多様な研究分野・活動分野で多様な意見が交され、それぞれに白熱したものであったが、その多くが博物館施設がかかえる現代的課題そのものであったように思う。

大会テーマとなった「博物館と地域社会」は、現代に於いて頻発している民族紛争を背景にしたものであるが、その内容は、むしろ博物館というものの社会的な立脚点を改めて見直そうという所に力点が置かれていたし、関連スピーチの中で「文化の多様性 Cultural Diversity」が「生物の多様性 Biological Diversity」と同列に論じられていたのもすぐれて今日的な視点であった。

茨城県自然博物館からは、早瀬長利教育課長と私が参加したが、総括的にみて初期の目的は達し得たと思う。特に、この大会を通じて、各国の様々なジャンルの人々と意見を交わすことができ、或る意味でのパーソナルネットワークをつくることができたのは、今後の館運営にとって大きなプラスになるはずである。又、私個人としては、それまで漠然と私の中にあった博物館という社会教育施設の21世紀への展望が、この会議を通じて改めて確認できたことも大きな収穫であった。

1. 自然史国際委員会（NAT HIST）

この委員会は、自然史系博物館を中心にして、動物園、植物園、野生生物園、自然保護センター、水族館等に属する人々が参加している。今回の参加者は50名ほどで、決して大規模なものではなかったが、委員会のテーマが「自然史博物館と生物多様性 Natural History Museums and Biodiversity」という最も今日的な議題であり、白熱した議論が行われた。生物が唯一住むことのできる場所である地球上の「生物圏 Biosphere」が、人類の経済活動にとって危機に瀕しているという現状認識の中で、この委員会が最も深い関心をもつ分野だからである。

基調講演は、ロンドン自然史博物館館長・ニール・チェルマース博士であった。

その内容は、現代の自然史博物館がこの分野で果たすべき役割、方法などについて示唆に富むものであり、それをめぐって討論が行われた。基調講演の概要は次の通りである。

基調講演概要

ニール・チェルマース博士

「世界の自然史博物館の所蔵品を合計すると、生物多様性の驚くべき宝庫だということが分かる。世界の自然史博物館自体の数は6,500施設をこえ、その生物標本の数は全体で250万から300万と考えられている（微生物を含まず）。これらの膨大な資料を駆使し、地球上の生物多様性を記録し、分析するのは自然史博物館の役目であり、それを果たすために、専門の研究者は、何百年という歴史を通じて蓄積された博物館の業績と研究個人の知識をベースに、生物の分類に関して比類のない知識を身につけている。

この視点からみれば、自然史博物館が現在の生物多様性の保存に大きな力となり得ると考えなくてははずだ。だが果たしてそうになっているであろうか？ 加速度的に進行する生物の多様性の危機をひき起こす現代の政治的コンテキストや経済的コンテキストの中であって、従来の博物館の在り方で対応できるのであるか？

例えば、生物多様性に関する情報は、農業・医学・薬学などの諸分野、そして特に自然保護に関する分野で求められている。そして、こうした分野で生物多様性に関する情報が必要とされる場合、その対応は、もはや、従来の博物館の人間では予期し得ないほどの、驚くべきスピードが要求されるのである。ここでは、長い年月をかけて生みだされたアカデミックなモノグラフや、生物の系統発生に関する分析などではなく、もっと簡潔で最新の情報を求めているのだ。この事情は相手が行政組織であれ、民間企業であれ、国際組織であれ同様である。現代の博物館利用者は、開発の環境への影響、自然保護における優先度の評価、特定の地域における動植物相など、最新ですぐ役に立つ情報を求めているのだ。それだけ生物多様性の危機がスピードアップしているということであろう。

しかし、従来の自然史博物館の在り方と、めまぐるしく変化する現代世界がつきつけてくる要求との折り合いをつけることは可能なのであるか？

私自身は、これを可能にしなければならないと考える。なぜなら生物の多様性は自然史博物館存在の前提であり、人間を含む生物生存の基盤となるものだからだ。

これからの自然史博物館は、独善的な調査研究機関であってはならず、新しい利用者に対して十分な考慮を払う存在でなければならぬ。そのためには、博物館の専門的な研究成果を一般利用者が活用しやすいような形に移しかえることも重要だし、分類学的な情報をネットワーク上でデータベース化することも大切であり、更に普段の普及教育活動が以前にも増して必要となろう——」。

この基調講演に対して、参加者から色々な意見が出されたが、その論旨に対しては積極的な賛意を表する者が殆どであった。特に、自然史博物館の展示の分野での役割は、その根底に生物の多様性の大切さを常に意識し、環境問題を市民に気づかせる（Awareness）ことが重要であるとするものが多かった。又、博物館の評価に関して、従来はそのコレクション・サイズで測るような傾向があったが、真の価値はそのサイズの大小よりも、そのコレクションをいかに情報提供と普及教育のために使っているか、で測らねばならぬとする意見は新鮮であった。

これらの点に関しては、私自身が従来考えて来たことの延長線上の課題でもあったが、特に、現代の自然史博物館が実際に動いている現在の社会、経済や政治と積極的に関わらねばならない、とする論が、或る意味で保守的なヨーロッパの博物館から提示されたことは刺激的であったし、人間活動の影響がそれだけスピーディに自然をおびやかしているということを再認識した。それまで産業重視的なアメリカの博物館に比べ、ヨーロッパのそれはどちらかというと、学術優先のアカデミックな感じがもたれていたからである。

我が国の自然史系博物館も、従来は他との連繋を余り重視しない孤立的な存在であったように思う。博物館が国や地方自治体の行政機関と直接的な関係をもって活動している例は決して多くないし、特に、自然史委員会の主題となっている「生物の多様性の保存」のための事業を協力して実施している例は少ない。又、生物多様性の問題についての地域活動実施に関し、地元の自治体や団体と協力関係も余り進んでいる例は殆ど聞かない。

比較的行われているのが、常設展示や企画展示の中での普及教育活動だが、これとても、学校や他の研究機関との連繋を軸にして実施されている例は少なく、この点、今後の博物館活動が行政、地域社会、研究機関などとのネットワーク構築が不可欠であるとの印象を強くした。

2. 自然と文化

総会初日、ノルウェー国・文化大臣・クリーブランド女史は、その挨拶の中で次のように述べた。

「ノルウェーの人口は4,300万人ほどだが、博物館の数は700～800にのぼる。この数と内容の多様さは、それらが地方分権の結果として成立していることを示す。博物館は歴史を語るだけでなく、博物館自身が歴史的反映であり、歴史的な現象である。それらを記録し、保存しておくことはその時代、その地方に育った文化的背景を知る上で重要な意味をもっている。18世紀から19世紀にかけて世界を席卷した産業主義 INDASTRIALISM は、それまでの農耕社会に於ける文化を忽ち破壊したし、現代はまた、その産業文化にも大きな変革が起こっている。それらを積極的に

保存する活動を展開しなければ、忽ち失われてしまうものだ。

それらを保存し、その文化の背景を正しく知ることは、自らの文化の理解は勿論、他の文化に対しての尊敬や認識を高める上で重要である。

このことは、人間が創造した文化のみでなく、人間活動の結果として影響を受ける自然も同様で、私たちは、今、自然史系博物館と人文系博物館との従来にないほどの協調関係が必要になっていると考えている——」。

私は、この考えを聞きながら、反射的に「世界遺産条約」のことを思った。ここに流れている精神こそまさしく、この条約の土台となるものだからである。1972年、ストックホルムで開催された国連人間環境会議では、人類の文化遺跡を保存すると同様に、自然環境についても保全のための措置を緊急にとらねばならないことが強調され、それを受けた「人間環境会議委員会」は、自然遺産・文化遺産の両方を同時に網羅する「世界遺産条約」を立案し、第11回ユネスコ総会で正式に採択され、1975年に発効したものである。

我が国の条約加盟は1993年（平成5年）であるが、文化遺産としては奈良県の法隆寺地域の仏教建築群、兵庫県の姫路城などが登録されており、同時に自然遺産として鹿児島県の屋久島や青森・秋田県の白神山地地域が登録されている。

文化遺産と自然遺産の保護が、この条約の中で“文化と自然は密接な関係にあり、いずれも開発の危機にさらされている”として同じに扱われることとなったのである。今や、国際的な保護が必要として登録されている文化・自然遺産は411件（1992年）をかぞえ、更に増加しつつある。

このことは、自然史系博物館が「生物の多様性」の保存に無関心でいられないと同様、人文系博物館が「文化の多様性 Culture Diversities」の保存に積極的な役割を果たすことが求められ、更に、これらの有機的な連繋の上に立った世界遺産の保存が、21世紀をむかえるすべての博物館の主要なテーマとなるはずである。これはまさに、クリーブランド女史が、その挨拶の中で述べた通りであり、イコム'95の最大のテーマであった、と私は思っている。

おわりに

私達は、今回が初めての参加であったので、自然史国際委員会の他幾つかの委員会にも顔を出した。特に印象深かったのは「MPR・INTERNATIONAL COMMITTEE OF MUSEUM PUBLIC RELATIONS・博物館PR国際委員会」である。この委員会への参加は、夜のレセプションでたまたま隣席であったベロー女史（MPR 委員会の前チェアマン）の強いすすめによるものであったが、PR、マーケティングという、我が国ではあまり普及していない分野だけに新鮮な内容であった。

又、エクスカーションの中で名刺を交わしたカナダのコールガン博士が、博物館の名称を NATURAL HISTORY MUSEUM OF CANADA から CANADIAN MUSEUM OF NATURE に変更し、より包括的な自然をめざす、と語ったのは印象深かった。茨城県自然博物館も IBARAKI NATURE MUSEUM であり、その意図する所が奇しくも同様であったからである。ちなみにカナダ自然博物館への名称変更は1990年からだという。

本大会への参加者総数はおおよそ1,500名という中で、日本からの出席が十数名と少なかったのは意外であった。文部省が把握している博物館数だけでも3,000施設をこえるという博物館国であり、しかも、教育大改革の真っ只中であって、そのドラスティックな変革を求められている現況下でのことだけに尚更である。私も日本博物館協会の理事の一人としてこの会議のPRに尚一層の努力をしなければと密かに思ったものである。

大会は3年毎、国際委員会は毎年（委員会によって異なるが）開催され、更に委員会ごとのニュースレターも出されていて、博物館の世界的潮流を理解する上では、やはりイコムへの参加は不可欠の条件ではないか、という印象を強く持った。

イコムとイコム日本委員会の更なる発展を期待してやまない――。

教育および文化活動のための委員会（CECA）に参加して

河 野 哲 郎
東京国立博物館専門職員

御存知の方も多いだろうが、イコムには参加国ごとの国内委員会（National Committee）のほかに各国の会員が加盟する国際委員会（International Committee）というものがある。これらは、美術（ICFA）、考古学と歴史（ICMAH）、自然史（NATHIST）など博物館が専門とする分野別の委員会と、博物館全体に共通する職員研修（ICTOP）やドキュメンテーション（CIDOC）などの問題をあつかう委員会とに大別できる。筆者は最近その後者の方のひとつである CECA のメンバーとなった。CECA とは、Committee for Education and Cultural Action（教育および文化活動のための委員会）の略で、少なくとも30年の歴史を持ち、現在25ある国際委員会の中でも主要なもののひとつと考えられる。最近 CECA の会員を対象とするアンケート調査がおこなわれたが、その時点での CECA の会員は1,063名で、その国籍は68ヶ国におよぶ。その調査の結果（回答は全体の約四分の一の会員からであった）によると、彼らが所属する博物館の種類は30タイプにものほり、最も多いのは美術館で、民族/民俗、歴史、科学技術系博物館がそれに続く。会員の

大部分は、多い順に教育部の部長、キュレーター、館長、教育担当職員である。

CECA が目的として掲げているのは、イコムの政策、決定、計画において博物館教育の視点を確保すること、世界の博物館の教育的な目的を唱道すること、博物館教育における専門的な水準の向上である。CECA は年一回の“イコム CECA ニュースレター”のほかにイコム発行のイコム・エデュケーションという雑誌の編集を担当している。イコムが定期的に出している出版物はこれ以外にはイコム・ニュースしかないことを考えると、イコムにおいて CECA が占める位置はかなり重要だといえよう。出版物の編集・発行のほかに世界各地で年一回会議を開いている。過去5年間の開催地とテーマは、'90年ボツワナ「博物館教育と環境」、'91年イスラエル「博物館の人々とニーズ」、'92年カナダ（イコムの大会の一部として）「博物館：その境界を再考する」、'93年インド「多文化社会のなかのまとめ役としての博物館」、'94年エクアドル「博物館、教育として自然、社会、文化遺産」、そして'95年は再びイコムの大会に合わせてノルウェーで「博物館とコミュニティ」というテーマのもとに開催された。

筆者のイコム大会出席はこれが二度目であるが、CECA のメンバーとしては初めての参加であった。大会のほかの会議—諮問委員会、アスパックの会議など—にも出席する必要があったため、残念ながら CECA の行事すべてには参加できなかったが、以下にその概略を報告する。

7月2日午前中はイコム大会の開会式があった。CECA のプログラムは午後の開会式で始まり、ひきつづいて基調講演がおこなわれた。翌3日の午後は、CECA、ICME（民族学）、CIMCIM（楽器）、NatHist（自然史）の4つの国際委員会が合同でミーティングを開き、それぞれの委員会から一人ずつ発表をおこなった。4日は午前中“Market of Ideas”というプログラムがあった。これは文字通りアイデアの市場で、発表者が10分以下の持ち時間内に自分が企画したりかかわったりした博物館教育プログラムについて述べるものである。5日は午前11時から午後6時まで「変化する社会の中の博物館と子供」というテーマでセミナーが開かれ、7名が発表をおこなった。以上で CECA のプログラムはすべて終了し、午後8時には全員が夕食をともにして閉会となった。このほかスタバンガー周辺の博物館見学や地元に関連団体との交流などがあったが、上述したように筆者はほとんど参加しなかった。

これら20を越える発表は長さも内容もさまざまであった。なかには英語以外の言語で行なわれ、通訳がなかったため内容が不明なもの、非英語圏の発表者の英語が聞き取りにくかったもの、内容が複雑すぎて口頭の発表には向かないと思われるものもあり、レジュメやその翻訳などをも充実させる必要を感じた。

2日の基調講演のひとつは、ノルウェーのベルゲン大学の教授による「文化のア

アイデンティティーの構築としての時代の展示」と題するもので、ニーチェやレヴィーストロースを引用するなどかなり難解であった。聴衆の中から原稿のコピーが欲しいという希望が出され、後日配布された。3日の四つの国際委員会合同のミーティングでの発表は、いずれも文化のアイデンティティーや多文化などを取り扱うものであったが、なかでも ICME のメンバーである、ロンドン博物館のニック・メリマン氏の話が具体的でおもしろかった。この「ピープリング・オブ・ロンドン：博物館での文化の多様性をとりあげる」(The Peopling of London: addressing the cultural diversity)と題された発表は、ロンドンがつい最近まで純粋な白人社会であったという漠然とした認識が実は誤りで、2,000年前から多人種社会であったということを、絵画を含むいろいろな資料で明らかにするという内容の、ロンドン博物館で最近開催された「ピープリング・オブ・ロンドン」という展覧会を紹介するものであった。”Peopling”という言葉は辞書をみてもびたりと合う訳語がないのだが、3日の午前中に大会参加者全員向けに行なわれた講演のひとつである、シカゴ歴史協会の Amina Dickerson の「博物館と文化の多様性：新たな挑戦」のなかでも“peopling the museum”という表現を使っており、新しい博物館用語のようである。動詞にすると訳しにくい、観念的な一般大衆というものに対して、実在する生身の人間というようなことであろうか。今大会のテーマが博物館とコミュニティであるから、そのコミュニティを実際に構成する人々と解釈してよいのかもしれない。つまり、ロンドンに住んできたそのような人々についての展覧会、そのような人々のための博物館にすることという意味になろうか。

4日の午前中の“Market of Ideas”はコーヒープレイクを含めた3時間の間に17名が発表をしたので、ひとりの持ち時間は実質せいぜい7～8分であろう。その中のいくつかをあげると、ドイツのマンハイム市立美術館の von Schem 氏は、近代彫刻を子供に鑑賞させるためにベンジャミンというキャラクターを作ったという話をした。ベンジャミンは背が低く、大きな鼻、大きな目、大きな足を持つ。背が低いのは、子供と同じ視点をもたせるため、鼻は旺盛な好奇心を象徴し、目は良く見ること、足は子供の歩調に合わせてゆっくり歩くことを意味しているという。この様なキャラクターを利用して子供たちに親しみを感じさせようというわけである。ベンジャミン人形が会場の入口で子供達を迎え、中に入った子供達は会場のベンジャミン・サインに導かれて彫刻の鑑賞を行なう。

イスラエルのハイファ博物館の Kanot 氏の話は、市の恵まれない人々が住む地域にある学校の11～13歳の生徒を対象としたプログラム「いかにして展覧会を作るか」についてであった。子供達を3回博物館に来させて、まず博物館、展示、収藏品などについて教え、「展覧会を作ろう」というワークショップをおこない、最後に生徒とその親達のミーティングを会場で行なうというもので、普段の見学とは違

う内容に、子供達は熱心に参加し、その成果は学校での美術のプロジェクトにすでに現われているという。

ベルギーのアントワープ現代美術館の Pas 氏は、遊びとしての美術というテーマで新しく実案された Kunstpluk というゲームの話をした。これは、丸い窓のついた小さな容器に美術作品と関係のある写真を入れて、それがどの作品と結びつかをあてるものである。中身を取り替えることによりさまざまな展示に使える、また簡単なものから難しいものまでいくつかのレベルのものを用意すれば子供から大人まで楽しめるものになる。

イギリスのナショナルギャラリーの Peppin 氏は、同館で行なわれた子供向けの気軽な休日活動のために作られた Interactive Not-Very Compact Disc を紹介した。中心をピンで止めた4枚の丸い紙で出来ていて、いちばん上の紙にくさび状の窓をあけ、半径が小さい二番目の紙には絵画作品の中から切りとられた人物の上半身を、三番目の紙にはその下半身を印刷してある。二番目と三番目の紙には「頭」「脚」とそれぞれ書かれた舌がついていて、それをもって回して正しい組合せをつくる。さらにそれが、4番目の紙（ディスク全体の裏面）に印刷されたどの絵（コンピューター処理で人物を消してある）からとったものかを当てさせ、最後に実際の作品を見るようにさせる。一番目の紙の縁には陳列室の番号があり、「頭」の舌をそこに合わせると窓にはその部屋にある絵が現われる仕組みになっている。人物の上半身・下半身にはそれぞれ彼らのせりふが書いてあり、違った組合せにすると非常に珍妙な文章が出来る。何とも楽しいこのディスクは、催しが開催された期間中子供達に無料で配ったのだそうである。経費については5,000枚作ったもののうち2,000枚を無料で配り、後日残りの3,000枚をショップで販売することによって回収できたとのことであった。

5日のセミナー「変化する社会の中の博物館と子供」で発表をおこなった7人のなかでは、地元ローガンド美術館の Bekkevold 氏による“ミュージアム探偵スヌープ登場”がいちばん面白かった。これは同氏自身がスヌープに扮して2歳から10歳までの子供達に絵画作品の見方を指導するもので、聴衆である CECA の会員を子供に見立てて実演してくれた。まずスライドで肖像画をいくつか見せ、いろいろ質問して人物の特徴など絵の細部に注目させる。つぎに額縁を取り出して脚、腹、顔と順番に当ててみせて、これは肖像画かな？とたずねる。額縁が顔の所にきて初めて皆が「イエース！」と答えるわけである。最後に二、三人指名して額縁をもたせ、悲しみ、怒りなどの表情をした肖像を演じさせる。このようにしてゲームをしながら肖像画とはどのようなものかを徐々に理解させるのである。2歳の子供にはどんなことをするのか、言葉をほとんど理解しないのではないのかという質問に対する答えは、言葉はほとんど使わず擬音語、擬態語や体の動きなどでいろいろ表現す

るのだということであった。

この話にしても、他の6人の話にしても、セミナーのテーマのうちどちらか一方に片寄った感じのものばかりであった。たとえばベルゲン大学で行なわれた調査報告は、大人が子供向けに企画を立てるとき、子供に面白いようにと興味深いたとえ話などを織り込んで説明すると、子供達は肝心の部分よりそのたとえ話で自分達がいちばん面白かったところだけを記憶してしまうといった内容であった。また、アムステルダムで子供に対して行なったアンケート調査の報告にしても、多文化と絡めているだけであった。そのなかでラトビアのリーガ市歴史博物館の Stamgute 氏の話は、ラトビアはまずドイツ、ついでポーランド、スウェーデン、ロシア帝国の領土となり、いったんは独立するが再びソ連の一部となって、1991年また独立したという、波乱にみちた歴史を持つが、その歴史資料が博物館にずっと保管されていたという。独立後は予算も少なく、これといった活動も出来ずにいるようであるが、保管されている資料によって子供達に歴史を教えてゆくことが博物館の大事な役割であるという内容で、筆者にとっては「変化する社会」をかえって最も強く実感させるものであった。

以上、4日間にわたるプログラムを簡単に紹介した。全体を通して感じたことは、CECA のメンバーに限ったことではないのだが、みんな生き生きと楽しそうなことである。行なわれた発表は先述のように内容もレベルもさまざまではあったが、自分たちの仕事を熱心に行なっているという点では共通するものを感じた。思うに博物館教育の目的な手段については異なる意見をもっているにせよ、来館者に楽しいひとときを過ごしてもらいたいという願いは同じではあるまいか。博物館教育に携わる人々は基本的に人を楽しませることが好きなのだと思う。

初めての CECA の例会は筆者には充分楽しいものであったが、参加者の一人はイコム大会と同時開催の時はどうしてもお祭りのな気分になら流されてしまうと言っていた。次回ウイーンはきっときっと充実したものになるだろう、発表の内容も今回より良いとおもうというその人の意見に、別の参加者の「さあ、今から来年のためにまたお金を貯めなくちゃ」という言葉が思い出された。

さて、予定の行事すべてが終わって8時から夕食会である。ここでも CECA のメンバーはその本領を発揮する。地元ノルウェーのメンバー有志のコーラスグループによるアメリカのスタンダードナンバーで始まり、宴たけなわともなるとあちこちのテーブルで数人のグループがそれぞれの国の歌を歌いだす。11時を過ぎてそろそろ臉が重くなってもなかなか終わる気配がない。12時近くになってこの部屋は12時までに出なくてはならないというアナウンスがあり、ようやくおひらきとなった。まだまだなごりおしように廊下やロビーで話し込む人々を後に外に出ると、緯度が高いせいで朝の8時と夜の8時とが同じ明るさというノルウェーでもこの時

間になるとさすがに薄暗い。コート無しではいられない気温に加えて夕方降った雨のために湿っぽい空気も、ワインとパーティの興奮のおかげで気にもならず、人通りのない町を筆者は宿泊しているホテルへと向かったのであった。

イコム大会報告書（第17回ノルウェー スタバンガー大会）

平成8年3月発行

編集・発行 〒100 東京都千代田区霞が関3-3-1
尚友会館

財団法人 日本博物館協会
T E L (03) 3591-7190
F A X (03) 3591-7170

印刷 (株)東京プレス

